

〔新収品紹介〕

小田野直武筆 江の島図

— 紙本著色 たて29.8cm、よこ50.0cm —

このたび、当館では秋田蘭画の代表的画家である小田野直武(1749—80)筆『江の島図』(写真1)を入手し、「江戸時代の絵画」展において初公開しますので、ここにそれを紹介いたします。

西洋画法を用いて描かれた日本絵画は、すでに桃山時代に登場しました。しかし、西洋画の合理的な視点と写実的な画法をもって、東洋画の主題や日本の風景・風俗などを捉えることがさかんになったのは、江戸時代も18世紀後半に入ってからです。この時代の日本では、学問や芸術において実証主義と批判精神が頭をもたげ、近代文化の基礎が築かれました。鎖国と封建体制のもとにありながら、長崎を通じてきて来る僅かな西洋文明の光を頼りとして、いわゆる蘭学が勃興したのも、この時代のことです。そして、江戸時代後期の洋風画は蘭学と密接な関係をもって誕生し、蘭書の挿絵や西洋の銅版画に認められる精緻な画法を導入して、日本絵画を改革しようとした。

江戸時代後期に最初の洋風画派が形成されたのは、長崎においてではなく、当時では北方の未開の辺土と考えられていた秋田においてでした。すなわち、安永2年(1773)

に秋田藩は領内の鉱山の改良と産額増大のため、蘭学の先駆者である平賀源内を招きました。そのとき、源内は秋田藩内の角館(かくのだて)の町で絵の上手な秋田藩士小田野直武に出会い、蘭書の挿絵を通じて知っていた西洋画法を直武に伝えたのが、秋田藩画のはじまりとされています。

直武は源内より教えられた舶来の新画法を、同じく絵をよくした秋田藩主佐竹曙山(1748—85)や角館城代の佐竹義躬(1749—1800)に伝え、ここに秋田藩の君臣の手で洋風画派が形成されました。長崎からはるかに遠い秋田の地に、江戸後期最初の洋風画派が形成されたのは不思議なことかもしれません。

しかし、直武は安永9年に僅か32歳の生涯を閉じるまでは、藩命によりほとんど江戸に滞在していました。また曙山や義躬らは参勤のため江戸に上るたびに、直武を呼んでともに西洋画法の研究に当りました。当時の江戸にはまだ本格的な洋風画家はいませんでした。杉田玄白や前野良沢らによって有名な『解体新書』の翻訳がすみ、中国風の写生画を描いた宋紫石や源内によって、西洋画法の研究がはじめられていました。結



(1)江の島図 小田野直武筆

局、秋田蘭画は江戸における西洋学芸研究の風潮に応じて生まれた江戸系洋風画と言えましょう。安永3年(1774)に出版された『解体新書』の挿絵を直武が担当したのは、その事実を象徴しています。

直武は武人画家でしたから、幼少より狩野派を学んでいました。そこで、彼の描いた洋風画は多く狩野派の花鳥画に西洋画法を導入したもので、『鷹図』(写真2)はその典型的な一例です。しかし、彼はその短い生涯の晩年に西洋の銅版画から学んだ細密な描線、透視遠近法、陰影法などを用いて、写実的な日本風景図を描こうとしていたようです。現在、直武筆あるいは彼の作と推定される日本風景図が10点ほど発見されていますが、その中には重要文化財に指定されている『不忍池図』(秋田県立博物館蔵)があります。このたびの『江の島図』も無款ながら作風の上で直武筆と推定されるもので、鏡に映しレンズで拡大して見る眼鏡絵として描かれたため、風景の左右が裏返しです。ただ、眼鏡絵としてはかなり大型なので、あるいは佐竹一族らの大名用であったかもしれません。

眼鏡絵を用いる視機械(のぞきからくり)は、風景が立体的に浮いて見えるので、江戸時代にはなほだ流行し、オランダ製、中国製のもののほか、円山応挙らの日本製のものも現われました。直武の

日本風景図の中にも、本図のような数点の眼鏡絵があります。

さて、江戸時代後期には従来の山水画ばかりでなく、日本風景の真景図を描こうとする動きが画壇に現われました。南画の池大雅、写生派の円山応挙らの仕事はその先駆で、直武の日本風景図も、広い意味ではこの流れに属します。しかし、直武は洋風画家でしたから、眼鏡絵として輸入された銅版筆彩の西洋風景版画から、合理的なものの見方を学び、より写実的な風景表現をめざしたのです。

小田野直武の仕事はその早逝により中絶しましたが、それは有名な司馬江漢に継承され、銅版筆彩の眼鏡絵や油絵の日本風景図として花を開きました。最近紹介された鳥海玄柳著・池田玄齋筆写『翁左備・拔書』(酒田市立光丘図書館蔵)には、江漢の洋風画の師は直武であったと書かれています。ここに、直武のものどよく似た江漢の『江之島富士遠望図』(氏家浮世絵コレクション蔵、写真3)をご紹介します。

幕末の北斎や広重の風景版画は古くから世界的な評価を受けています。しかし、彼らの風景表現は江戸後期の洋風画家、つまり小田野直武、司馬江漢、亜欧堂田善らの先駆的業績に学ぶところが多いのです。

(成瀬不二雄)



(2)鷹図 小田野直武筆

(3)江之島富士遠望図 司馬江漢筆

